

まんだら通信

第225号 (通巻260号)

平成27年03月 西暦2015年 佛暦2581年 皇紀2675年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

スマナー・ラーマヤ の仏塔落慶式

スリランカに行くと、いつも
コロンボ空港に着いてから帰
りの空港まで、ご自分のお仕事
をそっちのけのつきつきり
ご厄介になり、世界一小さいと
は言え子供たちの為の教育基
金『あそか基金』の面倒な管理



を一手に引き受け、何から何までお世話になっ
ているモットウネ・アングラサお坊様のお寺、
スマナー・マヤヤラ (日本語にすると清心寺)
で、仏塔ができて上がって、このほど盛大な落慶
式が行われました。

スリランカの言葉でダーガバといい、形は違
いますが、日本の五重の塔やインドのストウー
パ、ミャンマーやタイのパゴダと同じ、お釈迦
さまのご遺骨・舍利を納めたお堂ですね。

アングラサさんからのメールによると、高さ
約20メートル。着工してから五年はかかって
いると思います。経費は現在の日本円で八百
万円と言うことですので、実勢は恐らく一億円
を超えると思います。

そんなことより、三日間にわたり五〇人近く
のお坊様を招待し、二千人の村人が集まり、伝
統音楽が鳴り響き、空からはヘリコプターが花
を撒くという盛儀に、駆けつけることが出来な
かった我が身の不運が返す返すも残念でなり
ませんが、お檀家や地域の皆さんには語り草と

なり、未長く誇りとなつて行くことでしょう。

日本の出番

第二次世界大戦が終わったとき、世界中で何
百万だか何千万だかの命が失われていました。

昭和二十年三月十日の東京下町の、一般市民
への無差別攻撃という、国際条約に違反する大
空襲は、一夜で十万人以上が焼け死ぬという、
思い出したくもない、歴史上例を見ない被害を
受けました。東京に限らず地方の都市へも、同
じような一方的な爆撃が繰り返されました。私
の両親と妹も、あのださくさの中で満州の荒野
で全滅し、内地にいた私だけが生き残りまし
た。

勝った方も敗けた方も、「もう、殺し合いはこ
りごりだ」と、心底思つたはずですよ。

その舌の根も乾かないうちに、朝鮮戦争が起
き、ベトナム戦争が始まり、アジアで中東でア
フリカで、以来今に至るまで国と国だけでなく
アメリカや中国、ロシアなど国の中の血で血
を洗う争いや火種は、世界を見回せば一日たり
とも平和といえる日がない有り様に、人間つて
本当にバカなのだと思わざるを得ません。

あれから七十年。

一時的には『安保闘争』や『オウム真理教事
件』など、国にとって不安定な時期はありまし
たが、通して平穏無事な日本は世界でも稀な平
和な国といえます。

何故、七十年間も日本は平和なのでしょう
か。朝日新聞や日本共産党は「それは日本の憲
法が戦争を放棄したからだ」と言い、この考え
に賛成する人も『九条の会』など沢山います。

この考えが正しいとすると、外国人は日本の
憲法を知っていて、その条文を信用していると
いうことになります。

でも、これはウソですね。

人を信用するしないは、その人の言葉ではな
く行いによります。きれいな事をいくら並べて
も、していることが自己中心だったりすれば誰
からも信用されません。

日本が世界から信用されていることは間違い

ないと思いますが、一言で言えば大昔からの日
本人の生き方、『日本文化』が、世界の人たちに
受け入れられた、ということではないでしょう
か。

日本が開国した頃の世界は、白人国の分捕り
合戦の末、植民地でない国は、日本とタイとエ
チオピアしか無いという有り様でした。お隣の
清国の悲惨な有り様を目のあたりにした明治初
めの日本人は、国柄を守る為には、一刻も早く
力をつけることだと考えました。

私たちに実感は分かりませんが、植民地とい
うのは国が丸ごと奴隷になつたようなものだ
と、私は思います。

明治三十七年、ヨーロッパの大国ロシアと戦
い、漸くの思いで勝つことが出来ました。これ
を見た植民地の人たちは、自分のことのように
喜んで戦勝パレードをしたと、東京裁判で日本
無罪の判決をした、ラダ・ヒノード・パールさん
が言っています。インドだけでなくトルコでも
スリランカでも東ヨーロッパの、ロシアに苦し
められていた国々ではみんな同じでした。

もう一つ大事なことは、日本人はただ強いだ
けでなく、相手を思いやる心を大事にします。
一言で言えば『武士道』です。

大東亜戦争が終わって、元の植民国がベトナ
ムやインドネシアを取り戻しに来た時、これら
の国々では独立の為に立ち上がりましたが、そ
の主力は嘗て日本軍が組織した軍隊でした。

敢えて復員せずに、正義の為にこの独立戦争
に参加し、戦死した日本の将兵も沢山いまし
た。その頃から日本に親しみを持つアジアの人
たちは多いのだと思います。

ブラジルにはジャポネーズ・ガランチード(日
本人は信用できる)と言う言葉があるそうで
す。笠戸丸で最初の移民がブラジルに着いてか
ら百年あまり、言葉に尽くせないつらい暮らし
の中で、ご先祖の教えを守り、子供の教育に励
み、土地の人たちと仲良く暮らしてきた日系人
は、安心して付き合えると言うことですね。

NHKのテレビで、地元の人を雇って大根を
作っている日本人がいました。その地元の女性

は「他の国の雇い主は、口うるさく命令するだけだが、この人は先にたつて仕事をやるから私は好きです。」と言っていました。日本人への評価はハワイでもアメリカ本土でも同じです。一九九四年のロサンゼルス地震で、韓国人の店が軒並みに略奪に遭いながら、リトルトーキョーの店は被害がなかったという話を聞いたことがあります。

自分の正義を押し付けず、相手の話を良く聞き、傲慢にならず、宗教も含めたお互いの立場を尊重しあう暮らし方、つまり日本人の「和」の心だけが、これからの世界を住みよくするのではないのでしょうか。

につぼん人情小断 三遊亭鳳豊 第一一〇話 清掃員

今日は、ある清掃員のおばあちゃんにまつわる、いい話を紹介しましょう。

主人公は、金井トミ子さん(仮名)、七十五歳。ご主人と早く死に別れて、娘さんと小さなアパートでふたり暮らし。

娘さんは独身で、長い間、パートでスーパーに勤めていたのですが、五十歳になったのを機にリストラされ、いまはビルの掃除の仕事をしています。トミ子さんも、もともと清掃員として、がんばっていたのですが、やはり年齢制限もあり、仕事をやめなければならなくなってしまう。

しかし、年金もない、厳しい老後。娘の給料だけに頼るわけにもいかなないと、再び清掃の仕事を探しました。しかし、どこへ行っても高齢を理由に仕事がありません。しかも、高齢だけではなく、骨粗しょう症のためか、背中がかなり丸くなっているのです。

もともと小柄のうえに、背中が丸いので、新聞のチラシで清掃の仕事を見つけて面接に行っても断られてばかりでした。

(娘に迷惑をかけられない。自分が元気なうちは働かなきゃ...) そう思っていたトミ子さんに、款いの手を差し

伸べた「ビル・メンの足長おじさん」がいました。その名は、宇田一男さん。六十歳。株式会社アルファスペースという、ビルの清掃を取りしきる会社の取締役です。

「ビル・メン」とは、ビル・メンテナンス。ビルの清掃・点検・修理等一切をビルの待ち主から任せられ取り扱う業界を「ビル・メン業界」と呼びます。

宇田さんの仕事は、ビルの清掃の作業監督。会社が引き受けたいくつものビルの清掃・点検・修理のスケジュールを組み、そこにスタッフを派遣し、その場に行き、きちんと作業ができていくかを監督する、いわば現場の責任者です。

特に、メインの清掃の仕事は早朝から深夜にまで及びます。宇田さん、平均睡眠時間は三時間だそう。ビルの清掃と言っても簡単ではありません。十数階建てのビルの各室内をはじめ、階段、トイレ、廊下、エレベーター...そのすべてがきれいになつていなければならないからです。

でも、この仕事は立派な仕事だと宇田さんは信じています。「建物や部屋をきれいにすることとは、人の心を洗うことだ」と思っているからです。そして、宇田さんは、清掃技能者として、障害を持った人たちにその気持ちを伝え、清掃の技術を教えています。最近では、ドヤ街と呼ばれていた労働者の町で、働く喜びを伝えるために力を尽くしています。

こうした努力が実を結び、いまや、アビリンピック(障害者のための技能五輪)に、清掃という分野が採用されたほどです。

そんな忙しい宇田さんの前に現れたのが、背中の丸まったおばあちゃん、トミ子さんでした。

「お願いします。一所懸命働きますから、私を使ってください」

もともと娘さんを知っていたこともあり、宇田さんは、トミ子さんを自分のチームの一員に入れました。しかし、これは思ったよりはるかに大変でした。

清掃する仕事場がバスを降りて十分ほどのと

ころでも、おばあちゃんの足では三十分もかかってしまう。現場にようやくたどり着き、いざ、清掃をやらせてみれば、背が小さいために、高いところに手が届かない。椅子に乗って仕事をさせれば、椅子ごと転がり落ちる。おかしな行動をとつたり、非常ボタンを押ししたりしてしまうので警備会社が何度も来てしまう。

「宇田さん、あのおばあちゃん、やめさせてくれないか。そうしないと、中し訳ないけど、お宅の会社に頼めないよ」

ビルの管理会社から、宇田さんは何度言われたか、しれません。でも、そのたびに、ひたすら宇田さんは頭を下げ、お願いし続けました。これからは、私が常にそばについてやらせませうから、もう一回だけ、あのおばあちゃんにチャンスをおあげてください」

何とかクライアントを説得して、了解を得て現場に戻った時、トミ子さんは血だらけで倒れていたのです。

「どうしたんだ、金井さん！」聞けば、無理をして、高いところを掃除しようとして、台から転げ落ちて、頭を打ったようです。意識はすっかりしていたので、切り傷でした。持つていたタオルで傷口を縛り、救急車を呼びました。

すると、おばあちゃんは救急車に乗るのを拒否したのです。理由は、自分の不始末で、同じ仕事をしている娘がリストラをされるのではないかと、思ったからでした。

「大丈夫だよ、娘さんは朝五時から、一所懸命働いてくれてる。僕がやめさせないから」宇田さんがそう言うと、おばあちゃんは、救急車に乗りました。宇田さんは、スタッフを救急車に乗せ、自分は、スタッフとおばあちゃんの分まで、清掃をしました。

階段、トイレ、廊下...。いつの間にか、朝日がビルの窓から入り込んできました。

「ああ、今日も忙しくなりそうだな」

宇田さんは、大きな業務用の掃除機から手を放すと、窓からの光の中で、両手を上げ、大きく背伸びをするのでした。

忙しいご身分で、いつの間にお勉強をし、お書きになるのでしょうか。▼この季節になると毎年のように取り上げるこのハマダイコン【アブラナ科ダイコン属】。海岸の枯れたチガヤの中で、今はひっそりと咲いていますが、暖くなると見事な群生になります。私たちには当たり前前の景色ですが、青い海を背景に咲く群落は観光の人たちは喜ぶと思いますよ。

インターネットには、きんぴらなどの食べ方が色々ありますが、下ろし金での辛味は、比べ物がないほど強烈だそう。辛味ダイコンの替わりに試してみましよう。

2015.03.09 龍渉



▼今年もお天気が目まぐるしく変わる、春間近の季節になりました。お元気でしょうか。▼毎年期限すれすれですが、今年は慌てないように、余裕を持って確定申告に行ってきました。私のもうひとつの収入の道、『あそか工芸』はご存知の方も多いと思いますが、全焼しました。新しい作業場ができて上がるまで、よそから製品を仕入れて販売したので、売り上げは1,900万円であり変らなかつたのですが、手取りは始まって以来の-155万円の赤字。ですから所得税はなしですが、消費税は39万円也。消費税ってお客様からの預かり物ですので、理屈は分かるつもりですが、本体が赤字なのに税金がかかるって、なんかなあ。おまけに、職員が去年の控えを見ていて「あれえ。去年のは売上げの数字が一桁間違ってますよ」。つまり100万円に対する消費税になってました。この方の追加分が238,300円。

国の役に立つことですからいいのですが、正直踏んだり蹴つたり申告になりました。

▼千葉のちの電話への応援、大震災の東北地方への支援などで知る人ぞ知るアスカグループの丸渥一社長さんが『誰がこの国を守るのか』(知度出版)というご本を出しました。如何にも国を憂える保守の人らしく、事実を踏まえての内容は説得力があります。それにしても昼夜お

余滴